

熏風

教育委員会だより

第八号

平成三十年一月十五日(月)

河内長野市教育委員会

お正月の伝統文化をとおして 文化財保護を考える

毎年、歳の暮れから初めにかけて、「伝統文化は不変か、それとも可変か」と思うことがある。

私の住む近くに十数年前に二百数十戸の住宅地が開発された。犬の散歩でそこを通り抜けるが、クリスマスシーズンでは多くの家のドアにクリスマスリースが綺麗に飾られている。クリスマスも終わり、年末にはドアにしめ飾りが飾られている家は、クリスマスリースを飾っていた家の数よりぐんと減ってしまう。昔はしめ飾りを付けた車を多く見かけたが、近年は減多に見かけなくなったように、やがてしめ飾りを飾る家もほとんど見かけなくなる時代が来るのだろうかと思う。

また、この飾られているしめ飾りの型も多様化し、輪締め型のしめ飾りを多く見かけるようになった。これは東京に多い型で、引っ越しをされて来た人なのか、それともドアに似合うものを選んだのか。この地域ではごぼう型で向かって右が太くなっているが、地域によっては左が太いものもあると聞く。飾る期間も1月の7日までであったり、15日までであったりし、地域によって違うようであるが、最近では、輪型でフラワーアレンジしたようなものも見かけ、個人的には違和感を抱く。

しめ飾りの多くは、橙、譲り葉、裏白、昆布で飾られるが、橙は「代々反映しますように」、譲り葉は「子孫が途絶えないように」、裏白は「白髪になるまで長寿で」、昆布は「喜ぶ」を表すといわれている。語呂合わせではあるが、「家の繁栄」、「家族の健康」を願ってのものである。単なる飾り物ではないのである。



1月に流谷八幡神社で
行われる「勸請縄かけ」
(市指定無形民俗文化財)

お正月は、「歳神様を招いて五穀豊穡を願う行事」である。この歳神様を招くために、しめ飾りをするもので（災いが外から入ることを防ぐとも言われる。）、歳神様とは歳の始まりに山から下りて、家々に幸せと実りをもたらすといわれている。多くの人はお正月を「歳神様を招いて五穀豊穡を願う行事」なんて思っていないかもしれない。農業主体の国から、様々な産業によって国が成り立つ現在において、お正月の過ごし方自体も変わり、しめ飾りがフラワーアレンジされていて致し方ないことなのかもしれない。ならば、伝統文化は「可変」か。

しかし、ここで大切なことは「形」ではなく、その由来、謂れを伝えていかなければならない言うことである。伝統行事は、その時代の生活様式等の変化によって変容していくものであるが、「形」だけを伝えて行けば、それはやがて「意味のないもの」、「無駄なこと」として消滅していくであろう。

文化庁発出の文書をはじめ文化財に係わる我々は度々、「有形・無形に関わらず先人の不断の努力によって伝えられた文化財を確実に次世代に継承していく」という文言をよく使うが、確実に継承していくためには様々な文化財を表層的なところで捉えるのではなく、深層的な、つまり精神的なところも含めて理解していなければ、伝えることが難しいのであろう。前述したように伝統文化は、その時代の生活様式等の変化によって変容していくものであるが、そこにある「不変」のものを理解していかなければと、正月早々反省しきりである。

（文責：生涯学習部 ふるさと文化財課長 井上 剛一）



10月に長野神社で行われる
「タイマツタテ」
(市指定無形民俗文化財)